

聖学院大学総合研究所〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会・児童学科共催
2018年度第2回〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会
 発表者：小池茂子「大学の開放授業講座（リカレント教育事業）におけるリカレント受講生と
 正規学生の間に生じた教育的感化について——ジェネレイショナル・サイクルの視点から



発表者：小池茂子教授

2019年2月20日（水）、1201教室において、人文学部児童学科教授・小池茂子氏が、生涯学習の専門家として、リカレント教育の実践とその可能性について発表した。以下にその概要を報告する。

現在、埼玉県は県内の大学と協定を結び、55歳以上の県内在住・在勤者と大学の正規学生が同じ教場で学ぶ形の「大学の開放授業講座（リカレント教育事業）」を実施している。これを受けて、小池氏が本学で担当する「現代社会と社会教育」の授業では、20歳前後の正規学生と60代、70代のリカレント生が、高齢期をめぐる諸問題や高齢期の人間に特有の教育的ニーズ、高齢者の学習援助の理論等を共に学んでいる。このような異なる世代の共学が、正規学生・リカレント生の双方に如何なる影響を及ぼすのか、3年分の受講生の感想をテキスト分析の手法（IBM SPSS Text Analytics for Survey）を用いて分析し、エリクソン（Erikson, E. H.）の考える「ジェネレイショナル・サイクル（generational cycle）」の可能性についての考察が示された。

エリクソンは晩年の著作の中で、中年期の心理社会的適応課題としてきた「ジェネラティヴィティー（generativity）」を高齢期にまで拡張した。即ち、「育て-育てられる」という関係の連鎖を、家庭生活を場とする個人の成長の視点にとどめず、中年期から高齢期までを包含する心理社会的適応

課題とし、またそれを共同体全体に広げていけば、共同体の新陳代謝を促す世代から世代へと継承されてゆく関係につなげることができるという考え方である。このサイクルの中で、高齢期にある者は次世代に自らの経験を伝える役割を果たすことで統合性を持った自己が確立され、目前に迫る自分自身の恐怖を乗り越え心理社会的適応がもたらされる。また、後続世代が任務を終えたメンバー（高齢者）を看取る（感謝し、敬意を表する）ことによって共同体はリニューアルする。

2009年に発表されたチャン（Cheng, S. C.）の研究によれば、高齢者の「ジェネラティヴィティー」への関心の程度と心理社会的適応との間には正の相関関係があるという。さらに、高齢期において「ジェネラティヴィティー」と心理社会的適応の結びつきは、次世代から受ける「尊敬」の程度に大きく依存し、受ける「尊敬」が高いほど、心理社会的適応が達成されるとしている。

これらの先行研究を踏まえて、小池氏は、受講生の感想についてコンピュータのテキスト分析を行い、「頻出語」や主な「カテゴリ（テキストの中から深く関係している概念、意見、態度をまとめたもの）」を抽出し、異世代間のディスカッションを意識的に採り入れた授業の中で、55歳を超えて学んでいるリカレント生の姿は現役学生にどのように見えているか、またリカレント生は、現役学生と共に学ぶことをどのようにとらえているのか等、リカレント生と正規学生との共学における教育的作用を考察した。

現役学生の記述に「リカレント生」と関連して、「よい」と共に使用された言葉は、「楽しい」「面白い」「興味深い」「参考になる」「ためになる」などである。また、「新鮮」「刺激的」「違い」「価値観」などの言葉も見られた。また、感性分析によって導かれた「否定的」意見としては、「難しい」「疑問に思った」「別にしてほしい」「苦勞した」などがあった。リカレント生については、現役学生に較べて

人数が少なく、有意なデータとは言い難いところもあるが、テキスト分析による抽出では、「私・自分」-「授業」-「学生」というカテゴリに連なる記述が目立った。

この授業実践の中で、エリクソンのいう「ジェネレイショナル・サイクル」の萌芽は認められたかについては、20歳前後の現役学生が、60歳以上のリカレント生と共に学び、その学びを通じて「意見・考え方・視点」の「違い」に気付かされ、これらに「よい」評価を与えていることを踏まえれば、リカレント生によって現役学生にプラスの教育的作用がもたらされているといえる。その一方で、リカレント生の感想からは、現役学生を「育てる」「感化を与える」という記述は抽出されていない。リカレント生の関心は主に、「自分」の現在とこれからの課題に向いているが、現役学生との「ディスカッション・話し合い」がよかったとしており、異なる「世代」間において「新たな文化、思想が生み出される」というジェネレイショナル・サイクルの萌芽が認められるといえる。

社会人が大学で学んだ成果を正規学生の教育に還元している例として、学内の大学開放実践センターの公開講座を受講した社会人が地域社会人ボランティアとして初年次の教養科目（社会性形成科目群）のアシスタント等を務める徳島大学の実践が紹介された。

この発表の後、受講生の記述したテキストデータの集め方や、授業内容と共学による教育的効果の関連性についての質疑応答が交わされた。同じリカレント教育の枠内でも、たとえば、児童英語のクラスでは、引退後に、子どもたちに英語を教えたいという明確な目的意識を持って、本学の講義を受講するリカレント生がいることが紹介されるなど、講義内容によって、リカレント生の受講目的も様々である可能性が示唆された。また、経験や関心の異なる現役学生と社会人リカレント生の共学の場合、教員は、講義内容や専門性の難易度をどう調整していけばよいかなどの課題が提示された。

その他、埼玉県内で社会人が地域の小学生に学習成果を還元している事例も示され、学校、行政、地域の連携によるジェネレイショナル・サイクル

を実現するための仕組み作りもこれからの日本社会において必要であることが確認された。

（文責・松本祐子〔まつもと・ゆうこ〕 聖学院大学 人文学部児童学科教授）

本

書籍のご案内

お近くの書店、Amazon.co.jpからお買い求めいただけます。

魔女は真昼に夢を織る

松本祐子 著
イラスト 佐竹美保

2016年12月10日発行
2,300円（税別）

創作ファンタジー 3作と物語の
〈魔法〉をめぐる論考とコラム。



永遠の言葉

＜キリスト教概論＞

菊地 順 編著

2018年4月20日発行
2,400円（税別）

人生の糧となり、指針となり、
救いへの招きとなる一冊。



人間の本性

——キリスト教的人間解釈

ラインホルド・ニーバー 著
高橋義文・柳田洋夫 訳

2019年4月25日発行
3,700円（税別）

「人間とは何か」を根源的に
問い、状況に向き合う。



聖学院大学出版会 TEL:048-725-9801 FAX:048-725-0324
URL:https://www.seigakuin.jp